

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Heritage Conservation and Site Management in a Multicultural Society : Lessons from Future World Heritage Cities in Multicultural Malaysia

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇高, 雄志 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001587">https://doi.org/10.15021/00001587</a>

## 多元文化社会における文化遺産マネジメント マレーシアにおける世界遺産登録をめぐる

宇高 雄志

兵庫県立大学 環境人間学部 助教授

### Heritage Conservation and Site Management in a Multicultural Society Lessons from Future World Heritage Cities in Multicultural Malaysia

Yushi Utaka

School of Human Science and Environment, University of Hyogo

近年、世界各地において宗教、イデオロギー、民族の違いによる紛争による、歴史的遺産の無益な破壊が繰り返されてきた。文化遺産の保全を通じて、異なる文化や歴史観を相互に理解し、調和をはぐくむことは大切である。最近では、経済開発が急速に進むアジア諸国においてさえも、これらの価値の相克による遺産の破壊が、開発圧による破壊よりもより深刻であることが認識されている。

多民族社会における歴史的遺産の保全では微妙な采配が求められる。それは市民の価値が多様であるが故に、しばしば、すでに成立した社会や国家そのものや政治体制に対する疑問を伴い、また封印された過去の負の記憶に触れることも予測されるからである。

実質的に歴史的遺産は、それが社会や国家の内実とある程度の水準で正しく合致し表徴することが期待されている。故に、文化遺産保全における多くの場合、当局による選定過程や維持管理政策の立案の際に導入される、科学的な保存技術論はしばしば万能ではない。そこでは、その社会をとりまく国内外の政治的情勢の見極めが求められる。

それ故に、多民族社会における遺産の保全は、異なる民族間の価値の共有を確立する上で、保全過程に携わるすべての関係者にとって、きわめて困難な取り組みが予測できる。もっとも保存主義者がどう捉えようと、現実的には一つの遺産を含む都市空間は、様々な民族集団による文化が重層的に共有しつつせめぎ合い、またそれぞれの経済的な権益が複雑に絡み合っている。これらの社会文化的もしくは政治文化的要因は遺産保全のありさまを規定する。

マレーシアは多民族社会であり、また幾年もの間、幾重もの植民地支配や侵略を受けてきた。独立以降、マレーシアはその複雑で多元的な文化的な状況にありながらも、数々の政策の効果を受けて、著しい経済成長と民族関係の安定を成し遂げた。同国の国民国家の形成過程においては原則的に多元文化的状況をうけいれることが確認された。一方、マレー系文化やイスラム文化は公式に国民文化政策の中核に据えられ、これは文化財保護政策にも現れた。しかしながら、最近の国内外情勢の変動により、徐々に社会や国家を表す装置としての文化財の遺産への期待がうつろいはじめ政策論に変化の兆しがみられはじめた。

興味深いことに最近のマレーシアにおける歴史的遺産の保全では、多元文化主義的な理解や方法の導入に注目されている。これは多民族社会としてのマレーシアの魅力をはきだしそしてマレーシアナともよばれる国民統合像を表すものと期待されている。

本小論では、多民族社会マレーシアにおける歴史的遺産の保全を論じるとともに、世界遺産登

録を目指すペナンとマラッカにおける状況の描写をおこなった。加えてこの新しい状況と時代にむけた文化遺産の保全の方法論について若干論じたいと思う。

In the past decades, many societies and areas have experienced tragic destruction of precious heritage by religious, ideological, or ethnic conflict. Encouraging harmony and understanding of different cultural and historic perspectives through heritage management is an essential issue. Sometimes it is recognized as a more important factor than any economic development pressures, even though it has been observed among emerging developing countries in Asia.

In multi-ethnic societies, heritage conservation issues tend to be discussed sensitively; occasionally, it has caused the questioning of established nationhood or political systems, and touched concealed negative memories of the past.

In practical terms, heritage sites are always expected to reflect nationhood to a certain extent. Thus, in most cases, it is not always appropriate to gauge their historic significance, official selection process and site management policy according to conventional scientific preservation principals, without dealing with internal or external political circumstances.

It can be said that heritage conservation in multi-ethnic societies is quite challenging for the various actors involved, because of the need to ensure the sharing of the values of different ethnic groups. Additionally, present urban spaces exist on various types of historic layers and pragmatic interests of different ethnic groups, without any conservationist concerns. These socio-cultural and politico-cultural factors reflect well the approaches of heritage conservation.

Malaysia is a multi-ethnic nation which has experienced long years of colonial occupation and invasions. Since independence, the nation has experienced rapid economic development and stabilized ethnic relations inspired by the implementation of various policies, despite Malaysia's relatively complicated social and cultural diversity. Through the nation building process, multicultural principals have been widely introduced in Malaysia. On the other hand, Malay and Islamic cultures have been officially propagated in national cultural policy, which has appeared since the early 1980s, including in heritage conservation policies. However, the political application has been slowly transformed to "describe" Malaysia's nationhood, especially through heritage conservation, by recent internal or external changes in Malaysia.

Interestingly enough, in recent developments in Malaysian heritage conservation, the multicultural approach has now come to be highlighted in the site management approach. This will provide more opportunities to enhance the nation's charm and express the "Malaysiana" phenomenon.

This study examines heritage conservation in the multi-ethnic society of Malaysia and portrays her historic cities of Malacca and Penang – future World Heritage cities. The intention is to provide and propose a new heritage management approach in the new millennium in Asia.

- |                            |                                  |
|----------------------------|----------------------------------|
| 1 マレーシアにおける文化遺産の「発見」       | 3 多元文化社会における文化遺産の保存に向けて：マレーシアの挑戦 |
| 2 世界遺産登録と多元文化社会            | 4 結語：文化遺産保全のグローバルイゼーションを目前にして    |
| 2.1 文化遺産の選別と価値付け           |                                  |
| 2.2 保存地域の決定とゾーニングを巡る議論     |                                  |
| 2.3 都市遺産保存のイニシアティブと地区住民の役割 |                                  |

\* key words: Multiethnic Society, Heritage Conservation, Multiculturalism, Malaysia

\* キーワード：多民族社会, 文化遺産保全, 多元文化主義, マレーシア

多様な文化で構成される社会における、建造物の保存と利用にはセンシティブな議論をはらむ。そこでは一面的に建造物の新旧や、材料や形態的な「正しさ」だけでは価値づけできない。そもそも、国家の掲げる「正史」の前に、文化財の価値付けは流動的ですからあるからだ。また多民族社会では、一つの文化遺産に対し価値を共有することは容易ではない。

一方、都市遺産の保存には市民からも広い期待が寄せられている。歴史的遺産の活用による、地域経済の活性化論議も活発であり、保存事業による観光産業の振興から教育啓蒙まで広い範囲への波及効果が期待されている。

本小論では、マレーシアのマラッカとペナンを中心に、多元文化社会における文化遺産の保存と活用を論ずる。また、これまでの歴史的市街地の保存を巡る議論を整理するとともに、遺産マネジメントの将来について考察する。

## 1 マレーシアにおける文化遺産の「発見」

マレーシアにおける建築様式や建築語彙は、植民地支配、民族集団（マレー系、中国系、インド系、その他）や社会階層など、重層する植民地支配、民族集団などの複合的、多元的な背景の上に存在する。また、独立以降は、国民国家としてのマレーシアの存在をよりたしかにする必要があり、政治的に優位なマレー系の文化を国民文化に据え、またマレー系のほとんどが信仰しているイスラーム教を国教とした。

一方、イスラーム教やマレー系を巡っても、たえず論争が存在する。イスラームは1511年のポルトガルによるマラッカ侵攻の以前からマレー半島に存在したことになる<sup>1)</sup>。より原理的な発想をもつイスラーム系の団体の言説は、年々、それぞれのものが神話的にさえなっている。また、これまでも政権与党のUMNOと野党との間では、マレーシアが「世俗国家」か「イスラーム国家」かについて、めぐり議論が続いている<sup>2)</sup>。

しかし、2001年のアメリカでのテロ以降、マレーシアにおけるイスラームを巡る論

調は微妙に変化している。テロリストを擁する国家や社会集団とに一線を画することが、より多くの国際投資を促し、観光客を受け入れることにつながり、これが経済成長を維持する上で必須であると判断されたのである。

このため、近年では国内でも動きが警戒されるイスラーム原理主義と一線を画しつつ、世俗国家の側面をより強調する傾向にある。またイスラームのマレーシアでの受容過程に注目する傾向もみられる。中近東諸国におけるイスラームに宗教的オーセンティシティを求めつつ、一方でマレー・バナキュラリズムに注目し、マレーシアにおけるイスラームの固有性と安定性を強調しつつある。

これらのバナキュラリズムの強調は、様々な建造物のデザインとしてみられる。

マレーシアのヌグリスンビラン州 (Negri Sembilan) では、歴史的にマラッカ海峡の対岸のミナカバウに文化的影響を強く受け、伝統的な民家様式にも、「ミナカバウ様式」と呼ばれる棟がそりあがった建築語彙が成立している。この民家様式は、マレーシアのマレー系文化を代表し強調するものとして様々な場面で適用されてきた。同州の州都セレンバン (Seremban) には、最近でも多くの「ミナカバウ様式」のマレー民家がみられる。しかし、これらの建築語彙は植民地支配より以前から成立していたものではない。本来、「ミナカバウ様式」民家の屋根の反りは非常に緩やかである。

しかしこれが、民家の平面規模が大型化し、またトタン板金により工作が自由になるにしたがって、より反りが強くなり、視覚的にも建築構法的にもアクロバティックになっている。同州の一般の村落においても、民家の建築様式は、一般に経済的成長とマレーナショナリズムの高揚とともに、より大規模化し、屋根の反りが大きくなっている。

一方、「ミナカバウ様式」のデザインを取り入れた公共建築では、さらに屋根の形態が大型化し、また屋根面の曲面も複雑なものになっている。そこにはすでに、「ミナカバウ様式」の民家形式を超えた規模とデザインに到達している。このようにして、バナキュラリズムと結合したナショナリズムは、本来存在しない文化遺産を「発見」し、創作するに至っている。

このように、同国における文化遺産の「発見」は、マレー系の文化遺産に特化している。たとえば多くの大学では、積極的にモスクやマレー民家に関する研究やその復元技術の研究に注目されている。しかし都市住宅としての「ショップハウス」や、植民地に築かれた「バンガローハウス」には、その関心や考察が及ぶことは少なく、むしろ、在野や外国人研究者の研究成果が目立つ。

これらは、博物館での展示内容にも強く反映している。最近の博物館の展示では、民族ごとの文化や文化遺産の紹介をバランスよく配置するケースも増えている。支配者としての英国人やオランダ人の姿は都市形成史のなかではボリュームをさかれています。

1700年代後半のマレーハウスの復元民家。屋根は藁葺きであり、反りは緩やかである。(ヌグリスンピラン州立博物館・復元民家)



1800年代初頭におけるマレーハウス復元住宅。屋根が瓦葺きになり、屋根の反りがやや急になっている。(ヌグリスンピラン州立博物館・復元民家)



セレンバン市内にあるオフィスビル。与党UMNO事務所や銀行などが入っている。(セレンバン)



セレンバン市庁舎、ネグリスンピラン州のマレーハウスを模しているが、屋根の反りはより強調されている。(セレンバン)



図表1. ヌグリスンピラン州にみる民家様式とデザイン

い。ここで英国人やオランダ人の生活や足跡を全面的に押し出すのではなく、彼らをマレーシアにおける文化や歴史を彩る一部として位置づけている。むしろ、西洋植民地支配者とマレーシアでの移民との通婚の成果であるユーラシアン<sup>2</sup>の展示にスペースや面積がさかれている。

故に、マレーシアにおける、文化遺産の保全については、同国の国力をかんがみれば、それが法制度や保存財源の未整備から遅れたのではなく、このような政治的背景の元、その対応が保留されてきたとも理解できる。

しかし、最近の歴史的環境の保全や植民都市遺産の保全に対する世論の高まりは経済的な利益への期待に傾斜しているといつてよい。隣国のシンガポールでも観光客のいりこみが激減した1980年代後半に歴史的環境の保全が本格化する。シンガポールでは、観光振興、あの復興、市街地再整備の3点を歴史的環境の保全での目的にしており<sup>3</sup>、特に、観光振興上の意味が非常に大きい。保存事業の結果、それらが観光産業振興上で大きな成功を取めていることもあり、マレーシアでも関心が注がれている。

一方、独立以降、コロニアリズムを巡る議論が徐々に沈静化していることも見逃せない要因の一つである。コロニアリズムに対して、若年層はさほど過敏ではない。最近では、植民地遺産の文化要素が商品のブランドイメージとしても躊躇なく引用される。

また、従前はマイノリティとして位置づけられてきた中国系の都市遺産に対する意識の高揚もみられる。従前、彼らは共産主義との関係を疑われることを恐れ、故に、中国文化に対しては微妙な態度を維持してきた。しかし、最近では華人文化としての「南洋文化」を見直し復興させる動きがみられ始めた<sup>4</sup>。植民都市遺産の「商品化」は、都市生活者の遺産保存へのアプローチを政治的な呪縛から、一面では、解きはなしたともよみとれる。

## 2 世界遺産登録と多元文化社会

現在、マレーシアでは、世界文化遺産への登録を目指した準備作業が続いている。おおむね、保存の対象は、元・英領海峡植民地 (Straits Settlement) のシンガポールをのぞく、マラッカとペナンを同時に登録する方向で検討されている。世界遺産の登録では、(1) 文化財的な価値、(2) 適切な保存施策および都市計画法の存在、(3) マネジメント手法の存在 が詳細に検討される。世界遺産の企図そのものが、「人類の融和と文化の相互理解」であることもあり、直接的にその保存手法に対する、テクニカルな指針を保存物件の存在する国や地域に対して、強いることはない。また、世界遺産を、文化財保存政策が未整備な経済的發展途上国への普及をねらったこともあり、ガイドラインや勧告項目は必ずしも詳細にわたっていない。基本的には、その国の自立的な判断と価値付けにおうところが多い。また、国際機関が内政への干渉を犯して植民都市遺産

に価値付けすることは批判を免れない。

マレーシアでは、古物保存法（Antiquities Act (1976)）と、その州条例（マラッカでは州条例が1988年に施行されている）、および、都市計画法（Town & Country Planning Act (1976)）を世界遺産登録後の文化遺産の維持管理の根拠法としている。主な、マネジメント主体は、連邦政府および州の都市計画局が許認可権を有し、市政府（Municipal Council）が運用を受け持つ。また、連邦および各州に設置されている、博物館（Museum Co.）は、古物保存法の運用と、現状変更に対する、都市計画局の許認可に際する助言を行うことになっている。

現在は、古物保存法と、州条例を統合した文化財保存法（National Heritage Act）の制定を目指しているが、国会審議中である。2003年10月のマハティール前首相からアブドラ・バダウィ新首相への政権の転換もともなって、省庁再編もおこなわれ、依然として流動的な状況にある。

以下に、マレーシアにおける世界遺産登録を巡る現在の議論を整理する。

## 2.1 文化遺産の選別と価値付け

マラッカの文化財は、連邦法Antiquities Act に規定される、マラッカ州条例のMonumentとして規定される。現在指定されるモニュメントは、主に、城郭、寺院、モスク、墓所、石像、井戸であり、植民地時代に建造されたものが多い。またモニュメントは市街地に位置しているものが多い。

世界遺産の登録過程では、これらのモニュメントや市街地が、「多様な民族の交流の結果生まれた」としてとらえられ、現在の主要三民族とされる、マレー、中国、インド系以外のマイノリティの遺産や足跡も文化遺産の多様性を構成するものとしてあげられている。またマイノリティには、英国人、ポルトガル人やオランダ人、またユーラシアンも含まれ、独立以前と以降の都市形成の過程が連続的にとらえられている。

そこでのオーセンティシティは、旧宗主国の文化遺産との相似の度合いによって評価するのではなく、熱帯の気候下で異民族の交流の過程で生まれた、マラッカの都市文化の固有性として量られている。しかし、基本的にはマレー王朝に始まる植民支配以前の歴史が強調され、たとえばこれらは巨大なマレー王宮の復元やスルタンの墓所の「発見」につながっている。マラッカはマレーシアの歴史を定める上でも重要な役割を果たす。そのため、植民地支配期に過度に注目することなく、先史期からのマレー文化の連続性に注目されるのである。この場合、遺産の物質としてのオーセンティシティは保存や復元をする際の一つの判断材料にすぎないと言えよう。

マラッカでは、オランダ政府による援助を受けながら遺産の保存が進んでいる。また修復に対する資金援助は、オランダ大使館により旧政庁建物と教会の修理事業から始められた<sup>5)</sup>。また2001年にはオランダ東インド会社の記念フェスティバルが開催され記



念シンポジウムも行われた。これらは、オランダの研究者グループの関心によって提起されている。

最近では、コアゾーン予定地の中にある建物の撤去が話題となった。その建物には、歴代、纏足（てんそく）屋が入居し、最近ではアンティーク雑貨として愛されてきた。しかし、開発計画により、纏足屋は市街地から離れた建物に入居することになった。これらは生活文化と伝統の消失であると市民グループから非難の声が挙がったが、一方では、纏足が女性抑圧と旧弊の証であるとの反論もあり、文化遺産の価値づけが難しい。

そもそも、多様な価値が並存する社会において、統合された、ひとつの歴史を描写することは容易ではない。遺産とともに暮らす、市民にとって、個別の遺産や史実との交流の経験、ひいては正史としての歴史の流れとの交わりの密度はことなる。同時にことなる視点場からの歴史の描写の密度は多様であり、多元的である。ウィリアム・リムは遺産の保全を巡り、その歴史の描写を巡りそのあやうさと、求められる取り組みについて論及している。

“時と私たちの場所”と題された、シンガポールにおける最近のワークショップでは、遺産の重要性、どのように、また誰のために歴史は銘記されるのか、またなぜ加筆修正されねばならないのかについて議論された。

あるシンガポールの学者は、遺産の概念自体が潜在的に危険をはらんでいると主張している。考古学的な歴史モデルでは、歴史的な思考自体が、本質的に、時の瓦礫の山を掘り進み、歴史的事実として根拠が示されたもののみが、正しい起源をもつものとされたからである。

そのような歴史への視線は、必然的に現実にあられる歴史の複雑さを、単純な物語にしてしまうおそれがある。

(William Lim 1997 "Asian New Urbanism" Select Books : 宇高雄志訳「21世紀 アジア都市の未来像 シンガポール人建築家の挑戦」: 明石書店, 2004年)

## 2.2 保存地域の決定とゾーニングを巡る議論

世界遺産の登録過程では、バッファゾーンとコアゾーンを指定する必要がある(UNESCO, World Heritage オペレーションガイドライン-64-1)<sup>6)</sup>。コアゾーンは、世界遺産となる物件を指定し特に歴史的価値の高い物件を指定する。またバッファゾーンはコアゾーンの破壊や破損を防ぎ、良好な歴史的環境を保存するために指定される。

2001年末現在、マラッカの場合は、世界遺産への登録をめざして、中心市街地のうち、主に要塞と旧政庁建物、マラッカ川、旧市街地がコアとして、またバッファはこれらの周囲を含む地域を想定している。バッファには、コアゾーンの周辺に現存する歴史的市街地を含んでいるが、それ以外にも1980年代に埋め立てられた埋め立て地と



図表 2. マラッカに現存する 旧政庁Stadthuys立面図  
 (所蔵: Malaysia Heritage Trust / 作図: Liman bt hj Kasim dan Laurence Vis Architect)



図表 3. マラッカ世界遺産登録準備委員会の想定案  
 (マレーシア世界遺産登録準備委員会検討資料より / 再作図: 山崎大智)

住宅団地、州政府の建物など公共建築を含んでいる。これらは、バッファゾーンに指定された後の現状変更による景観調整を行うことを期待して設定されている。世界遺産登録に向けた予備作業では、これらのコアゾーンに含まれる歴史的価値とモニュメントを含む遺産の保存の現況が整理されている。

しかし、これらの線引きには、少なからず異論が存在する。コアゾーンに想定されている範囲のうち要塞は植民地支配の過程で築かれたものであり、また旧市街地は中国系や、ババニョニヤの市街地が大半を占める。これには今回の世界遺産登録の際にもっとも重要なキーワードとなっている多民族社会の有する文化的多様性描写しを包含することができない。登録委員会のメンバーの中からも、コアゾーンに隣接するマレー系村落のカンボンモルテン（マレーシアの村落美化コンテストで賞を得ている）や、インド系のコミュニティの中心となっているチェティアの居住地を含めるべきだとの意見も強い。面的にコアゾーンを設定し、歴史的な景観の連続性を重視すると、マラッカ世界遺産登録でも重要なキーワードになっている、多民族文化の連続性の保証がむずかしい。

これらの意見に対応して、現在のコアゾーンの中心部に、マラッカ各地に散在する民族文化の舞踊や演劇を公演する施設の建設を検討している。しかし、こうした安易な歴史的遺産のステージカルチャー化は、観光客向けに演出された仕掛けにすぎず、都市遺産の持ち味を失わせるとの批判が強い。また観光地としても確たる整備ビジョンがなく、民族集団や階層集団への利益が明確でないとの批判も少なくなく、各民族集団からの積極的な投資や協力がむずかしい。

コアゾーンに指定される旧市街地の中国系市民の中には、保存事業の開始にともない不動産価値が低下することを不安に思う市民も少なくなく、逆にコアゾーンからはずれたマレー系やインド系の居住地では、世界遺産登録以降に期待される、周辺地区での不動産需要や観光開発に先行した投資を期待する市民も少なくない。

今後の検討では、バッファゾーンおよびコアに指定される地区の内部で、優先順位に応じて点型や小規模な面型の保存方針を検討することになっている。また、保存地区の線引きの際に地区外住民を含めた市民の意志の反映が求められている。

### 2.3 都市遺産保存のイニシアティブと地区住民の役割

マラッカの世界遺産の保存登録を巡っては、これまでも官民双方による積極的な保存施策が展開されている。しかし近年では観光振興への過度の期待から、すでにくつかりのショップハウスでは本来は存在し得ない壁面色の再塗装や装飾が行われている。またシンガポールなどの巨大資本の開発計画もこれらの都市遺産の商業利用と活用を加熱する原因となっている<sup>7)</sup>。保存事業が一段落したシンガポールの保存関連業者にとって、近隣国のマレーシアは次なる不動産投資の対象として捉えられる。歴史的遺産を使いこなし創造的に活用しようとする姿勢は評価できる。しかし過度の商業路線への傾斜

は、歴史的建造物のオーセンティシティに準拠しないこともあって、逆に建造物の持ち味を失わせる危険性がある<sup>8)</sup>。

マラッカでの観光客の過半は、大半がクアラルンプールやシンガポールからの日帰り観光客で、宿泊をする観光客は全体の3割程度にすぎない<sup>9)</sup>。典型的なマラッカにおける観光行動は、ポルトガル時代の植民地遺産としての要塞と、セントポールの丘にある教会跡、オランダ時代の総督住宅跡、マレー王宮建物の博物館での滞在に限られる。滞留時間は2.5時間程度ときわめて限られる。

観光客の志向に沿って観光ルートが設定されていると言うよりも、業者の設定したシナリオに大きく依存している。ユネスコの文化遺産保全賞を受賞したババニョニヤ住宅などのある中心市街地には、大型観光バスをとり回す余地がなく、観光業者には不評である。都市全体に、保存事業を通じて周到に用意された文化遺産も、相互連携と演出が未成熟な現在では受け手に十分に伝えられているとはいえない<sup>10)</sup>。

いずれの問題も、本来ならば地区住民によっても、慎重に議論されるべき性格のものであるが、地区内には、異民族、異業種をつなぐ統合的な社会集団は存在しない。マレーシアでは、個々の民族集団ごとに利益を代表する政党と地区住民の関係が強いため、地区を代表し意志を決定する住民団体が無い。

たとえば、試行的に街路を歩行者専用化し屋台街を行う試みでも、地区選出議員の働きかけで行われていると認識されるため、逆にこの議員や政党を支持しない者や非営業者の反発は大きい<sup>11)</sup>。結果、保存事業が自ずと政治や行政の意志決定によると認識され開発が優先される結果となっている。

一方で、個別の民族社会の中では、すでに民族文化の保存を目指して活動を始めている。たとえば、中国系の寺院の管理団体は、信徒集団からの寄付のみで修理を行っている。修理の水準は国際的にも高く評価されている。またババニョニヤの団体は、私設博物館や資料室などを設けている。しかしこれらは、あくまでも個々の民族史や家族史を表現するものであって、他民族との交流の成果をかたる仕掛けに欠け、また都市史との連続性で描かれることは少ないと他の民族集団には捉えられる。

そのため、多くの市民にとっては、保存地区の存在も、NPOの存在も認知されていないのが現状である。

最近ではマレーシアにおける家賃統制令 (Control of Rent Act) が撤廃され<sup>12)</sup>、多くのショップハウスの賃貸価格が急激に上昇している。2002年2月にはペナンでは、家賃が払えずそのまま残留していた家族の住む、老朽ショップハウスが突然倒壊し、人命が奪われている<sup>13)</sup>。近年までは一見注目されていなかった都市遺産の保存が、こうした居住権としてや、市民の生死に関わる人権上の問題としてクローズアップされている。

同時に、歴史的環境の保全で目指される文化財の保存が、限られた社会階層に偏っているとの批判も強い。たとえば、苦力 (クーリー) と呼ばれる港湾労働者の中国系の

生活の痕跡や、後に述べるが、「からゆきさん」などの足跡は、物的な痕跡が少ないこともあってか、現時点で保存の対象になることはない。

まさしく、この社会においても文化遺産の保全は、限られた階層が、限られた社会集団の、文化と遺産を再構成し、表象する状況に陥りつつあると言えるのではなかろうか。Peter J Larkhamはこのように論及する。

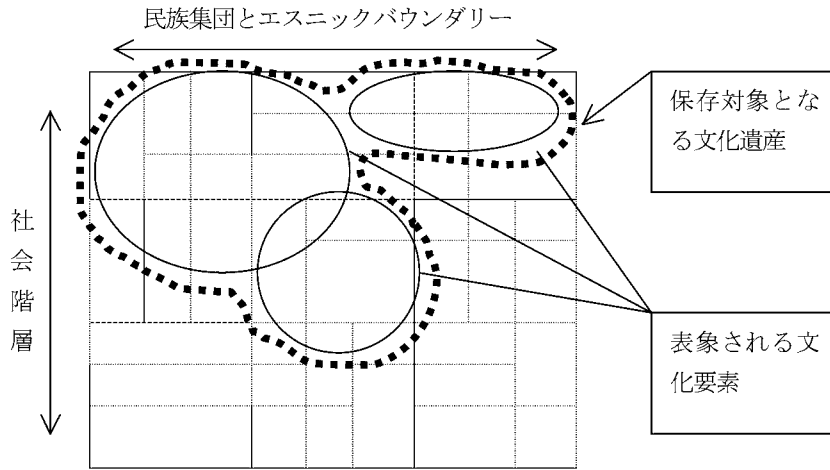
たとえ保存をエリート主義者の活動として戯画風に描かれたとしても、それは驚きに値しない。そしてそれはミドルクラスの活動として現れるのだ。(Peter J Larkham, 1996, *Conservation and the City*, Routledge)

### 3 多元文化社会における文化遺産の保存に向けて：マレーシアの挑戦

近年、NPOが中心になって、歴史的遺産の保全を目指すケースもでてきた。たとえば、ペナン文化遺産トラスト (Penang Heritage Trust) は、多くのショップハウスなど戦前建築物を抱えるペナンにあって、積極的に保存活動を展開している。ミドルクラスの、英語教育を受けた、政治的にも有力な中国系のメンバーを多く抱えることもあり、メディアや政治的な力を有しているが、より広い範囲の世論の支持はこれからの課題になっている。特に、政治的優勢なマレー系にとっては、中国系の文化遺産に直結するショップハウスは、価値付けが難しい。しかし、長年の取り組みは社会に広くいけ入れられ、また既存政党や各種団体と距離を保つことで、広い層の民族集団や社会階層の市民に肯定的に受け入れられている。

ペナン州・ジョージタウンでは2001年から2002年にかけて、NPOが中心になって国際会議『ペナン・ストーリー』が開催された。多民族都市としてのペナンの都市の歴史を、特に生活者のオーラルヒストリーの発掘を通じて再発見する試みである。イベントは、「マレー系」、「中国系」、「インド系」と続き、「マイノリティ」を対象にしたセミナーが開催された。マイノリティを対象にしたセミナーの趣意では、「ペナンストーリーでは、ユーラシアン、タイ、ビルマ、スリランカ、フィリピン、バタク、日本、アルメニアン、ユダヤなどの出身を持つマイノリティたちの歴史をひもときます。そこでは移民たちがどのように移住し、結婚し、定住したかについて論じ、また移民の末裔たちが現在、どのように彼らの民族文化についてアイデンティティを感じているかについて論じます」と謳われている<sup>14)</sup>。

従来ならば、民族ごとにその歴史を語ることは、民族ごとのナショナリズムをかき立て、分離的な議論に陥ることをおそれたため、ある種のタブーとして避けられてきた。しかし、このイベントでは、あらゆる支配、摩擦の痕跡をより生活者に近い視点か



民事集団の社会集団の枠組みを固定した時点で本来の多元性は表現し得ない。また、民族と階層という2次元で表現されるよりもはるかに、実際の社会は多元的で複合的である。しかしながらこの単純なマトリクスのセルとセルでさえ、個別の歴史や文化を統合的に表現することは容易ではない。

図表 4. 民族集団、社会階層と文化要素の関係 試論



図表 4. ペナンに残る戦前・戦中期の日本人の生活と建築物  
 左：旧・日本人置屋跡 (Chulia Street) 撮影：筆者  
 右：旧・ペナン日本人会館跡 (Leith Street) 撮影：筆者

ら描くことを目指している。あらゆる民族の存在にもポリティクスやコロニアリズムが反映していたとはいえ、そこでの営為が現在の都市社会の礎になったとの理解にたっている<sup>15)</sup>。

たとえば、マイノリティとして描かれた日本人については、戦前より存在した、日本人置屋の存在が指摘されている。また会期中に解体された、旧アサヒ屋ホテルが紹介されている。

マレーシアの世論でも、日本軍の侵略行為には依然として厳しい視線が向けられている。特に、大量虐殺を受けた中国系マレーシア人にとっては、依然、日本人の侵略行為は過去のものではない。一方で、マレーシア社会にとって、侵略者・加虐者としての日本人と、現在の経済建設のパートナーとしての日本人へのイメージとの断絶感はおおきい。現在、ペナンには多くの日系企業が進出し、数千人の日本人が居住し日本人学校もある。正史の上での加虐者としての日本人像と、いま、このときもペナン社会の一員として暮らす、現在の日本人像はつなぎ合わせにくいのである。

これらの史実の再発見と描写では、おおくの若いアマチュア歴史家による地道な取り組みによってあきらかになりつつある。ここで紡ぎだされる、忘れられた史実には、しばしば語り手の立場の自由さと若さからか、ある種のあやうささえも感じる。しかし、国家の語る正史に学ぶことになれた者にとっては、そこに、ある種の新鮮さを感じないといえ、それは嘘になるだろう。

ここで語り出されようとしている、歴史は、正史でもなく、多くは市井の生活者のふつうの暮らしと彼らの存在の証である。これは、植民地支配や民族対立といった幾多もの悲劇と痛みを超えて、政治的に正しい民族関係を描こうとするかにも見えた、これまでの語りとはことなる。個々の生活者や系譜を同じくする者の存在と足跡をより鮮明にし、異なる他者の存在への想像力を確かめる試みともいえよう。

マレーシア社会の多民族社会とのおびただしい多元性を、単純化することなく正視しはぐくむことは簡単な仕事でない。もっとも、記録や事物なども少ないマイノリティの足跡の蒐集は非常に時間のかかる取り組みである。しかし、この蓄積が、市民自らが、より自由な視点で多元性の中にある自己をふくめた、総体としての文化遺産を価値付けし、保存活動を動機づける重要なとりくみであるに違いない。そしてこれは、ナショナリズムやコロニアリズムといった、時代の呪縛から解きはなされた、よりしなやかな多元文化主義による、社会の確立のきざしを予感させる。

#### 4 結語：文化遺産保全のグローバルイゼーションを目前にして

世界はいまや「世界遺産インフレ」ともよべる時代にさしかかっている。世界文化遺産はすでに700を超える。今日も地球のどこかで、新しい世界遺産が生まれようとして

いる。遺産の保全は、その価値づけやおこないそのものがグローバルイゼーションの流れに取り込まれつつあるとさえいえよう。

文化財の保存も、従前ならば、国内のポリティカルコレクトネスにのみによって、その過程を決定できた。しかしいまや、地球上のより広い多様な価値観を持つコミュニティのまなざしを意識しつつ、文化を保存し、再編し、強調する必要が出てきた。同時に、世界遺産インフレは、地球上に無数の世界遺産を登場させることになり、これは、「同種」の文化的、歴史的卓越性の中で、おのずと競合関係をさえ生じさせることになっている。

人々の営みや、歴史的背景に優劣はない。ひとりひとりの存在と、その固有性は尊い。しかし、世界遺産をのみ、ひたすら目指すまなざしに、そのことをとらえる余裕はあるだろうか。

文化遺産の保存は、この混乱の世紀において、他者への想像力をはぐくみ、開放系の秩序を生み出すきっかけになるのか。それとも、この先もポリティクスに翻弄されつつ、断片化された文化要素と史実のただよう、無幻空間に人々を再びさまよわせるのだろうか。挑戦は始まったばかりだ。

※本小論文は、科学技術研究費補助金『植民都市の起源・変容・転成・保全に関する調査研究』報告書掲載の、拙稿「植民都市遺産の保全と活用」5-39頁〜につき大幅に加筆を行ったものである。

## 注

- 1) Sarina Hayes Hoyt 1993 “Old Malacca” Oxford University Press
- 2) 篠崎香織 2002 『UMNO 政権への支持を強めた華語誌の論調』 JAMS NEWS, p24-28
- 3) 宇高雄志, Malone Lee Lai Choo 「シンガポールの歴史的市街地の保存における保存ガイドラインの運用実態」 建築学会計画系論文集
- 4) ベナンでは、「南洋文化」財団が発足し、写真家や画家などのグループがショップハウスを改造しアトリエ活動を行うなどし始めた。従来は法律によって禁じられていた、華人系大学の政府認可などの動きを反映しているとみられる。
- 5) New Straits Times 1989.07.25
- 6) Section 64, Operational Guideline for the Implementation of the World Heritage Convention
- 7) 中国報 2000.10.14 : 重回 300 年前風貌 ?
- 8) The Star 2001.12.20 : From Historic to Plastic?
- 9) MPTBM 1998 “Malacca Tourism Master Plan” MPTBM
- 10) Malay Mail 2000.02.25 : Saving Malacca’s Soul.
- 11) 南洋新報 2001.09.19 : 古董街 275 商民忍無可忍。
- 12) 宇高雄志, 岡本祐紀 「植民都市における都市計画制度の導入とその今日的影響」マ



レーシアの家賃統制令の廃止と市街地変容を巡って」建築学会計画系論文集, 529号, PP.211-216, 2000.03

- 13) New Strait Times 2002.02.19 : Collapsing Walls kill baby boy. Prewar house cave in injures too.
- 14) Penang Heritage Trust 2002 “Penang Historical Minorities” leaflet of event.
- 15) Khoo Su Nin 1993 “Streets of George Town Penang” Janus Print& Resources, p.71, p.79

## 文 献

Dieter, H. and Korff, R.

2000 Southeast Asian Urbanism – The meaning and Power of Social Space, Institute of Southeast Asian Studies.

Mohd. Amirrudin Fawzi Bahaudin, Siew, T. T. and Aranas, R.

1991 The Third International Training Workshop on Strategic Areal Development Approaches for Implementing Metropolitan Development and Conservation, United Nation Center for Regional Development and Municipal Council of Penang Island.

Lim, J. S. H.

1993 The ‘Shophouse Rafflesia’, Journal of Malayan Branch of the Royal Asiatic Society, Vol.66, Part1.

Ahmad, A. G.

1997 British Colonial Architecture in Malaysia 1800-1930, Kuala Lumpur: Museums Association of Malaysia

Crouch, H.

1996 Government & Society in Malaysia, Allen & Unwin Australia,

Mohamed Amirrudin Fawzi and Siang, L. H.

1996 Chapter 13 - Tourism Heritage Project: Community Involvement in 3 Malaysian Cities, Chong, H.K. et al. (ed.) Critical Perspectives on Cities in South East Asia, Brill Academic Publishers (forthcoming) pp.316-317.

Noor, W. M. M. M.

2002 Legislation on Conservation, The study on Improvement and Conservation of Historic Urban Environment in Historical City of Melaka, Organized Malacca Municipal Council and Japan International Cooperation Agency.

Utaka, Y. and Fawzi, M. A.

2002 The Malaysian Multicultural Streetscape: Challenges in the New Millennium, Great Asian Streetscape Symposium at National University of Singapore, pp.81-96.

Larkham, P. J.

1996 Conservation and the City, Routledge, p.14.

Milne, R. S. and Mauzy, D. K.

1999 Malaysian Politics under Mahathir, Routledge.

Malacca Municipal Council Report

2003 The study on the Improvement and Conservation of Historical Urban Environment in the Historical City of Malacca.

Municipal Council of Malacca report

1999 Tourism Development Report.

Yamashita, S., Din, K.H. and Eades, J.S. ed

1997 Tourism and Cultural Development in Asia and Oceania, National University of  
Malaysia Press.